
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 京浜電車《けいひんでんしゃ》の中で

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 午後|京浜電車《けいひんでんしゃ》の中で

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [#地から1字上げ] (大正六年九月十七日)

(一しょに大学を出た親しい友だちの一人に、ある夏の午後|京浜電車《けいひんでんしゃ》の中で遇《あ》つたら、こんな話を聞かされた。)

この間、社の用でYへ行った時の話だ。向うで宴会を開いて、僕を招待《しょうだい》してくれた事がある。何しろYの事だから、床の間には石版摺《せきばんず》りの乃木《のぎ》大将の掛物がかかっている、その前に造花《ぞうか》の牡丹《ぼたん》が生けてあると云う体裁だがね。夕方から雨がふったのと、人数《にんず》も割に少かったのとで、思ったよりや感じがよかった。その上二階にも一組宴会があるらしかったが、これも幸いと土地がらに似ず騒がない。所が君、お酌人《しゃくにん》の中に

君も知っているだろう。僕らが昔よく飲みに行ったUの女中に、お徳《とく》って女がいた。鼻の低い、額のつまった、あすこ中《じゅう》での茶目だった奴さ。あいつが君、はいっているんだ。お座敷着で、お銚子を持って、ほかの朋輩《ほうばい》なみに乙につんとすましてさ。始《はじめ》は僕も人ちがいと思ったが、側《そば》へ来たのを見ると、お徳にちがいない。もの云う度に、顯《あご》をしゃくる癖も、昔の通りだ。僕は實際無常を感じてしまったね。あれでも君、元は志村《しむら》の岡惚《おかぼ》れだったんじゃないか。

志村の大將、その時分は大真面目《おおまじめ》で、青木堂へ行っちゃペパミントの小さな罐《びん》を買って来て、「甘いから飲んでごらん。」などと、やったものさ。酒も甘かったろうが、志村も甘かったよ。

そのお徳が、今じゃこんな所で商売をしているんだ。シカゴにいる志村が聞いたら、どんな心もちがするだろう。そう思って、声をかけようとしたが、遠慮した。お徳の事だ。前には日本橋に居りましたくらいな事は、云っていないものじゃない。

すると、向うから声をかけた。「ずいぶんしばらくだわねえ。私《わたし》がUにいる時分にお眼にかかった切りなんだから。あなたはちっともお変りにならない。」なんて云う。お徳の奴め、もう来た時から酔っていたんだ。

が、いくら酔っていても、久しぶりじゃあるし、志村の一件があるもんだから、大《おおい》に話がもてたろう。すると君、ほかの連中が気を廻らすのを義理だと心得た顔色で、わいわい騒ぎ立てたんだ。何しろ主人役が音頭《おんどう》をとって、逐一白状に及ばない中は、席を立たせないと云うんだから、始末が悪い。そこで、僕は志村のペパミントの話をして、「これは私の親友に臂《ひじ》を食わせた女です。」莫迦莫迦《ばかばか》しいが、そう云った。主人役がもう年配でね。僕は始から、叔父さんにつれられて、お茶屋へ上ったと云う格だったんだ。

すると、その臂と云うんで、またどっと来たじゃないか。ほかの芸者まで一しょになって、お徳のやつをひやかしたんだ。

ところが、お徳こと福竜のやつが、承知しない。福竜がよかったろう。八犬伝の竜の講釈の中に、「優楽自在なるを福竜と名づけた」と云う所がある。それがこの福竜は、大に優楽不自在なんだから可笑《おか》しい。もっともこれは余計な話だがね。その承知しない云い草が、また大に論理的《ロジカル》なんだ。「志村さんが私にお惚れになったって、私の方でも惚れなければならないと云う義務はござんすまい。」さ。

それから、まだあるんだ。「それがそうでなかったら、私だって、とうの昔にもっと好い月日があったんです。」

それが、所謂片恋の悲しみなんだそうだ。そうしてその揚句に例《エキザンプル》でも挙げる気だったんだろう。お徳のやつめ、妙なろけを始めたんだ。君に聞いて貰おうと思うのはそのろけ話さ。どうせのろけだから、面白い事はない。

あれは不思議だね。夢の話と色恋の話くらい、聞いていてつまらないものはない。
(そこで自分は、「それは当人以外に、面白さが通じないからだよ。」と云った。「じゃ小説に書くのにも、夢

と色恋とはむずかしい訳だね。」「少くとも夢なんぞは感覚的なだけに、なおそうらしいね。小説の中に出て来る夢で、ほんとうの夢らしいのはほとんど一つもないくらいだ。」「だが、恋愛小説の傑作は沢山あるじゃないか。」「それだけまた、後世《こうせい》にのこらなかった愚作の数も、思いやられると云うものさ。）」

そう話がわかっていれば、大に心づよい。どうせこれもその愚作中の愚作だよ。何《なん》しろお徳の口吻《こうふん》を真似ると、「まあ私の片恋って云うようなもの」なんだからね。精々そのつもりで、聞いてくれ給え。

お徳の惚れた男と云うのは、役者でね。あいつがまだ浅草 | 田原町《たわらまち》の親の家にいた時分に、公園で見初《みそ》めたんだそう。こう云うと、君は宮戸座《みやとざ》か常盤座《ときわざ》の馬の足だと思うだろう。ところがそうじゃない。そもそも、日本人だと思うのが間違いなんだ。毛唐《けとう》の役者でね。何でも半道《はんどう》だと云うんだから、笑わせる。

その癖、お徳はその男の名前も知らなければ、居所《いどころ》も知らない。それ所か、国籍さえわからないんだ。女房持か、独り者か。そんな事は勿論、尋《き》くだけ、野暮《やぼ》さ。可笑しいだろう。いくら片恋だって、あんまり莫迦《ばか》げている。僕たちが若竹へ通った時分だって、よしんば語り物は知らなかりうが、先方は日本人で、芸名 | 昇菊《しょうぎく》くらいな事は心得ていたもんだ。そう云って、僕がからかったら、お徳の奴、むきになって、「そりゃ私だって、知りたかったんです。だけど、わからないんだから、仕方がないじゃありませんか。何《なん》しろ幕の上で遇うだけなんですもの。」と云う。

幕の上では、妙だよ。幕の中でと云うなら、わかっているがね。そこでいろいろ聞いて見ると、その恋人なるものは、活動写真に映る西洋の曾我《そが》の家《や》なんだそう。これには、僕も驚いたよ。成程《なるほど》幕の上では、ちがいない。

ほかの連中は、悪い落《おち》だと思っただけ。中には、「へん、いやにおひやかしかる。」なんて云った人もある。船着だから、人気《にんき》が荒いんだ。が、見たところ、どうもお徳が嘘をついているとも思われない。もっとも眼は大分《だいぶん》とろんこだったがね。

「毎日行きたくっても、そうはお小遣《こづか》いがつづかないでしょう。だから私、やっと一週に一ぺんずつ行って見たんです。」これはいいが、その後《あと》が振っている。「一度なんか、阿母《おつか》さんにねだってやっとなんか貰うと、満員で横の隅の所にしか、はいれないんでしょう。そうすると、折角その人の顔が映っても、妙に平べったくしか見えないんでしょう。私、かなしくって、かなしくって。」前掛《まえかけ》を顔へあてて、泣いたって云うんだがね。そりゃ恋人の顔が、幕なりにぺちゃんこに見えちゃ、かなしかろうさ。これには、僕も同情したよ。

「何でも、十二三度その人がちがった役をするのを見たんです。顔の長い、痩せた、髭《ひげ》のある人でした。大抵黒い、あなたの着ていらっしゃるような服を着ていましたっけ。」僕は、モオニングだったんだ。さっきで懲《こ》りているから、機先を制して、「似ていやしないか。」って云うと、すまして、「もっといい男」さ。「もっといい男」はきびしいじゃないか。

「何《なん》しろあなた、幕の上で遇うだけなんでしょう。向うが生身《いきみ》の人なら、語《ことば》をかけるとか、眼で心意気を知らせるとか出来るんですが、そんな事をしたって、写真じゃね。」おまけに活動写真なんだ。肌身はなさずとも、行《ゆ》かなかった訳さ。「思い思われるって云いますがね。思われない人だって、思われるようにはしむけられるんでしょう。志村さんにしたって、私によく青いお酒を持って来ちゃくたすった。それが私のは、思われるようにしむける事も出来ないんです。ずいぶん因果じゃありませんか。」一々 | 御尤《ごもつと》もだ。こいつには、可笑《おか》しい中でも、つまされたよ。

「それから芸者になってからも、お客様をつれ出しちゃよく活動を見に行っただけですが、どうした訳か、ぱったりその人が写真に出てこなくなっちゃったんです。いつ行って見ても、「名金《めいきん》」だの「ジゴマ」だのって、見たくも無いものばかりやっているじゃありませんか。しまいには私も、これはもう縁がないもんだとさっぱりあきらめてしまったんです。それがあなた……」

ほかの連中が相手にならないもんだから、お徳は僕一人をつかまえて、しゃべっているんだ。それも半分泣き声でさ。

「それがあなた、この土地へ来て始めて活動へ行った晩に、何年ぶりかでその人が写真に出て来たじゃありませんか。どこか西洋の町なんでしょう。こう敷石があって、まん中に何だか梧桐《あおぎり》みたいな木が立っているんです。両側はずっと西洋館でしてね。ただ、写真が古いせいか、一体に夕方みたいにうすばんやり黄いろくって、その家《うち》や木がみんな妙にぶるぶるふるえていて。そりゃさびしい景色なんです。そこへ、小さな犬を一匹つれて、その人があなた煙草をふかしながら、出て来ました。やっぱり黒い服を着て、杖をついて、ちっとも私が子供だった時と変っちゃいません……」

ざっと十年ぶりで、恋人にめぐり遇ったんだ。向うは写真だから、変らなかりうが、こっちはお徳が福竜になっている。そう思えば、可哀そうだよ。

「そうして、その木の所で、ちょいと立止って、こっちを向いて、帽子をとりながら、笑うんです。それが私に挨拶をするように見えるじゃありませんか。名前を知ってりゃ呼びたかった……」

呼んで見給え。気ちがいだと思われる。いくらＹだって、まだ活動写真に惚《ほ》れた芸者はいなかりう。

「そうすると、向うから、小さな女異人が一人歩いて来て、その人にかじりつくんです。弁士の話じゃ、これがその人の情婦《いろおんな》なんですとさ。年をとっている癖に、大きな鳥の羽根なんぞを帽子につけて、いやらしいったらないんでしょう。」

お徳は妬《や》けたんだ。それも写真にじゃないか。

(ここまで話すと、電車が品川へ来た。自分は新橋で下りる体《からだ》である。それを知っている友だちは、語り完《おわ》らない事を虞《おそ》れるように、時々眼を窓の外へ投げながら、やや慌しい口調で、話しつつけた。)

それから、写真はいろいろな事があって、結局その男が巡査につかまる所でおしまいになるんだそうだ。何をしてつかまるんだか、お徳は詳《くわ》しく話してくれたんだが、生憎《あいにく》今じゃ覚えていない。

「大ぜいよってたかって、その人を縛ってしまったんです。いいえ、その時はもうさっきの往来じゃありません。西洋の居酒屋か何かなんでしょう。お酒の罎《びん》がずうっとならんでいて、すみの方には大きな鸚鵡《おうむ》の籠が一つ吊下げてあるんです。それが夜の所だと見えて、どこもかしこも一面に青くなっていました。その青い中で 私はその人の泣きそうな顔をその青い中で見たんです。あなただって見れば、きっとかなしくなったわ。眼に涙をためて、口を半分ばかりあいて……」

そうしたら、呼笛《よびこ》が鳴って、写真が消えてしまったんだ。あとは白い幕ばかりさ。お徳の奴の文句が好《い》い、「みんな消えてしまったんです。消えて儚《はかな》くなりにつけりか。どうせ何でもそうしたもんね。」

これだけ聞くと、大に悟っているらしいが、お徳は泣き笑いをしながら、僕にいや味でも云うような調子で、こう云うんだ。あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ。

だが、ヒステリイにしても、いやに真剣な所があったっけ。事によると、写真に惚れたと云うのは作り話で、ほんとうは誰か我々の連中に片恋をした事があるのかも知れない。

(二人の乗っていた電車は、この時、薄暮《はくぼ》の新橋停車場へ着いた。)

[# 地から1字上げ] (大正六年九月十七日)

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986(昭和61)年10月28日第1刷発行

1996年(平成8)7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971(昭和46)年3月～1971(昭和46)年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。